

くおてんと様をみるく

季節は立秋を過ぎたけれど、沖繩の暑さはまだまだというところ。太陽を仰ぐと、そのまぶしさに目が眩みます。

先人達は、そんな太陽の光から時を読みとっていた…そんな話しを取り上げてみます。

幸地部落の南側・アドベンチストメデイカル病院のすぐ側に、刻時森クキジムと呼ばれる小高い丘（標高百四十二メートル）があります。ここは、尚敬王の時代（一七一三年～一七五六年）に、蔡温がこれまでの不完全な漏刻の法を改正するため、日影を観測させた場所なのです（『球陽』尚敬王二十七年条）。観測には王府の役人・小波津里垣のほかに、

地元の人もその役目をつとめていました。その人は後に「時外間トウツツカマ」と呼ばれ、地元幸地にはその人物についての言い伝えが残っています。観測は一七四〇年二月から翌一七四一年十月までの一年八ヵ月あまりにわたって行われ、刻時森頂上に日影台と漏刻桶を造り、その関係から正確な時を測る方法を得たのでした。その後、観測所は首里城の漏



△現代にたたずむ刻時森

刻門に移されました（※西原町史第四巻資料編三 西原の民俗百十二頁）。

現在の刻時森には、当時の遺構として頂上部に三メートル四方の削平された平場があり、そこへ上る上り口も取り付けられています。ここからの眺めは、中城湾がよく見渡せ、太陽の観測には絶好の場所となつています。

その昔、先人達は太陽や月・星や風といった大自然から知識を得、様々な法則を導きだしてきました。現代の私たちにも大自然の法則が体感できるかどうか、皆さんも腕時計をはずしてためされては？誰です、腹時計なら自信がある、なんていう人は。